

包慕萍著

モンゴルにおける都市建築史研究

——遊牧と定住の重層都市フフホト

小長谷 有 紀

はじめに

本書は、そのタイトルが明瞭に示すように、モンゴルの都市建築の歴史的變容に關する研究書である。それでは、ここで言う「モンゴル」とはどこか、「都市建築」とは何か、扱われている「歴史」はいつからいつまでかという、對象設定に關する三つの質問がおそらく讀者に生じるにちがいない。サブタイトルに注目すると、明らかにフフホト市にのみ焦點をあてた表現になっているので、これらの質問に對するおおよその回答は得られるであろう。と同時に、このサブタイトルには著者による概念的な枠組が提示されている。すなわち、遊牧と定住とを豫め對比的に扱ったうえでこれらを併せ持つところにフフホトの意義が見出されていることがサブタイトルから推察される。これらメインとサブの二つのタイトルからさらに推測すると、フフホトが例外でない限り、フフホトに關する著者の理解はおそらくモンゴル高原全體あるいはモンゴル史全體にわたって當てはめられていく可能性は高

い。しかし、そもそもこうした概念的枠組の設定は妥當なのであるうか。

以上のような問いに關連して解説する形で、本書の内容を詳しく紹介するとともに、本書に提示された遊牧と定住をめぐる概念設定について私見を加えて展望し、書評の責をふせぐこととしたい。

研究史上の位置づけ

著者の包さんは、あとがきによれば、中國內蒙古自治區錫林郭爾盟に生まれ育ち、大學で建築學を學び始めた頃から、モンゴルの建築史を學びたいと志したところ、先行研究がほとんど無いために自ら研究することとなった。瀋陽の近代建築史に關する共同研究を通じて日本の東京大學に留學することとなり、藤森照信教授のもとで研究を續けたとのことである。その成果は「モンゴル地域フフホトにおける都市と建築に關する歴史的研究所（一九七三—一九五九）」という博士論文として提出され、當該論文は、優れた人文・社會科學系の博士論文に贈られる、第二回井植記念アジア・太平洋研究賞を平成十五年に受賞した。既に評價を得た勞作を一般學術書として讀みやすくまとめたのが本書である。著者による博士論文のタイトルがいみじくも示しているように、都市建築史は都市の歴史と建築の歴史とともに扱わなければ成り立たない。ただし、廣義の建築史のうち、モンゴル民族の住居として知られている天幕（ゲル）について、その構造の歴史的變容などは省かれてもかまわないだろう。モンゴル建築史についてはすでに、例えば社會主義時代にモンゴル人民共和國の閣僚も務め

ていた歴史學者マイダルが、本書で紹介されている研究書や邦譯されている一般書など一連の著作を多數残しているが、當時の政治的環境から中國内蒙古自治區のフフホトが對象として取り上げられることはなかった。一方、フフホトに關する研究は、明代蒙古史研究の一部として青木富太郎、和田清、とりわけ萩原淳平によつて開拓された日本での蓄積があるけれども、空間的分析や建築學的視點には缺けていたと言わざるを得ない。

これに對して著者は、後述するように、地方志類の地圖を十全に用いながら現地をよく歩いてフィールドワークの成果を活かすことによつて、空間的分析に成功している。その意味で、フフホトを對象とする、都市空間ならびに建築の歴史について、本書は類例をみない研究業績として高く評價される。

モンゴルの都市史にとつて、フフホトと並び立つほどの重要性をもつ都市としては他に元朝時代の大都（現在の北京）やカラコルム、清朝時代の庫倫（現在のウランバートル）などが直ちに挙げられよう。それらの重要な都市群に關する從來の研究成果も取り込んで考察の射程に収めている本書は、それゆえに、フフホトに焦點をあてたモノグラフであるにとどまらず、モンゴル都市建築史と題するだけの内實を備えており、その點でも本書はまさに嚆矢であると言つてよいであらう。

本書の意義

本書は、序章と終章を含めて五つの章から構成されている。

序章「清朝藩部から近代へのまなざし」では、從來の研究史と著者の問題意識が簡潔に述べられている。すなわち一般に「都市

というものは定住文明の上に成り立つもの」という認識があった」（三頁）のに對して、「遊牧文明圏に屬するモンゴルに、定住型農耕文明とは異なる建築や都市の造營システムが存在することを提示」（三—四頁）することが本書の究極の目的である。卑近な言い方をすれば、都市という定住的要素をもたないと思われてきたであろう遊牧世界においても、固有の都市の姿があったに違ひなく、その姿を描いてみたい、というわけである。讀者はここに、著者自らの民族的アイデンティティ（彼女の姓である包はボルジンギンすなわちチンギス・ハーン一族の末裔であることを意味する）と研究者としての使命とが重複していることを確認することができる。

この研究にとつて最大の障害は「遊牧文明による都市類型がそのまま残された都市や建築のサンプルが現在では存在していない」（四頁）ことであると言う。そのまま残されていない代わりには「異質な文明、文化との遭遇」（四頁）によつて變容しながら現在に至っているという見解をもつ著者は、それゆえにフフホトを例にとつてその變容を跡附け、近代化を考察すると宣言する。なぜフフホトを選択するかについては必ずしも明らかではないが、その資料の豊富さからみて妥當な選擇であることは疑いない。

そもそも研究蓄積の少ない分野である研究史を概観した著者が指摘する、最大の研究史上の缺陷は「國家單位で行われていた」（七頁）ことであり、それを克服するために著者は、いわゆる外蒙古と内蒙古の雙方を視野に入れるとし、その意味で「清朝藩部から」という表現が用いられている。と同時に、元代にも言及し、とりわけフフホトの起源そのものは明代にさかのぼるために明代

も視野に入れるとしても、具體的な分析記述はもっぱら清朝時代であるという意味も含まれている。すなわち、本書における考察対象の、空間的側面では廣義において清朝藩部であり、時間的側面では狹義において清朝時代であることが二重に序章のタイトルに表されていると言えよう。

序章において最も注目すべきは、游牧世界にあるにちがいないであろう獨特の都市について著者が「游牧都市」(一〇頁)というオリジナルな概念を假説的に措定している点であろう。この未論證の前提を、先見による視野狹窄の弊害から守るために、著者はとりあえず幅廣い概念で提示している。例えば、モンゴル語でオルドと呼ばれる、モンゴル游牧王朝における宮殿すなわち動く宿營據點のようなものや、游牧世界に作られた非游牧民による居住地などのいずれかではなく、いずれをも含めている。具體的には、カラコルム、上都、大都などに關する從來の研究を整理しながら、游牧民がゲルを建てる空間的餘地が城内にあること、ただしモンゴル人にとって城内はもっぱら冬季用であること、しかし非游牧民は年間を通して利用すること、あるいはまた店賣りの商店より市場が繁盛していたことなど、いくつかの特徴を列挙していく。假にこれらの特徴をめぐる記述が正しいとしても、特徴の列挙は「游牧都市」に關するイメージを豊かにすることはあつてもただちに概念規定とはなるまい。またこの概念は明らかに「農耕都市」の對概念として提示されうるが、それとの對比は不明である。むしろ、本書全體を通して、「游牧都市」という概念は果たして成立するのだろうかと讀者をして問ひかけさせること、そうした知の提供にこそ本書の大きな意義がある。

機能複合體としての都市の生成

第一章〈モンゴル王權およびチベットと佛教治下の「游牧都市」〉では、「モンゴルが清朝に編入される以前の二五〇年代から一六三六年までの時期、および清朝に編入された後、漢人のモンゴルへの移民が禁止されていた一七二〇年代までの時期」(三七頁)が扱われる。一五五〇年代とはアルタン・ハーンの治世を意味し、一六三六年とは國號が「大清國」に改められた年、すなわち右翼モンゴルの王侯たちが參集して清朝藩部になる契機となつた年であり、この時からモンゴル高原南部は清朝時代に入ると言つてもよい年號である。したがつて本章では、漢人の移民による定住化現象が著しくなるよりも以前に、長城に接する北部草原においてどのような都市化現象が見られたかについて跡附けられているのである。

アルタン・ハーンは、一五七一年に明と「隆慶の和議」を結ぶことに成功し、その結果、「互市」が開かれることとなつた。いわば國家間の契約に基づいて時期と場所の決められた國際交易が始まつた。翌一五七二年には、失われた大都になぞらえて城郭都市フフホトの建設が始まる。その中核となつているのは一般に中國式の城郭都市バイシン(大板升)であるとされている。著者もまた現地調査によつて、現在のフフホトを中心として周邊にバイシンという地名が複数確認されることから、この説を支持している。フフホトに先行する城郭都市バイシンは、すでに流入していた漢人を居住させる目的でアルタン・ハーンによつて一五六五年に建設された。やがて一五七九年には、やはりアルタン・ハーン

によってチベット佛教の本格的導入が圖られる。その後、城外にいくつもの寺院が建設されてゆく結果、「フフホトはハーンの都市から宗教都市へと變身していった」(六九頁)とまとめられる。

本章で注目しておかなければならないのは、本章の最後に「遊牧社會における都市の構成要素とその形態」(七六頁)という節が設けられて、遊牧社會における都市の定義が試みられている點である。「遊牧都市」の定義と讀み替えてもよいであろう。著者は「草原という人口密度の低い地域にあつて相對的に人口が集中している場所を都市と定義」(七六頁)している。さらに、この人口集中地區は、複数の機能の複合體を呈している點が重要であると見ている。最初の漢人居住地區、城外に設けられた家畜市などの市場、寺院などがあり、清朝になると職種ごとに集住地區が確認され、それは現代の地名にまで連綿とつながっていく。「離れ離れのように見えても、馬での移動によつて都市機能を補完し合うことが可能な」「數カ所の居住地が複合して都市が構成されていると定義できるであろう」(七六―七七頁)としている。

そもそも、遊牧世界であれ、農耕世界であれ、およそ都市というものは何らかの機能中心であり、單一の機能に特化している事例よりもむしろ複数の機能が集積しているほうが多く、また都市は機能の複合化によつて發展すると一般に認識されている。ただし、このような機能複合體としての姿が、固定的施設が建設されていない所いば餘白部の存在によつて明示されやすいという特徴は、遊牧世界における都市の形態的特徴として見出しうるかもしれない。評者としてもこのような「遊牧都市」をめぐる概念の提案は大いに受け入れて検討していきたいと考える。

著者はさらに、複合機能體である都市について、寺院や職人町のような定住的要素と、ハーンの居住地である移動的要素とに分し、これらの混在を強調する。そして、このような混在は、アルタン・ハーンがフフホト建設において模範とした大都にも見られたがゆえに十三世紀に遡りうる特徴であるとし、またウランバートルの前身であるイヘ・フレーでも「固定的な家屋や寺院と移動的なゲルが並存していた」(七九頁)から同じであると見なす。その結果、フフホトの事例に限らず普遍的にモンゴルにおいては「遊牧的要素と定住的要素が複合して、都市が形勢されていったのである」(八〇頁)というような本章の結論となつてしまふ。つまり、機能複合體としての指摘は、結果的に建築物として移動性の高いゲルが有るか無いかに收斂してしまつており、いかにも論理的な縮みを起こしていると感じてしまふのは評者だけではあるまい。構造物のもつ移動性という觀點をむしろ積極的に消去したほうが「遊牧都市」という著者の概念提起は有意義になるのではないだろうか。

このオリジナリテイの高い概念を體現するモンゴル語として、ホトとフレーについて解説するにあたつても、それらがもともとゲルの集合體であり、したがつて移動性を有していたことが重視されている。すると、それらのあいだの機能的な違いについてはほとんど意識されなくなつてしまふ。著者は、フレーという語が現代語として圍いや圓形を意味すること、圓形がチベット佛教における曼荼羅の構圖と一致していることに注目しているが、著者自身、圍われていない事例や、圓形というよりも四邊形に近い事例を圖示している(六二頁)。そもそも、フレーとは軍事や祭

祀など特定の目的のために集う行爲であり、集った結果として圓陣隊形となることを指し、一方ホトは家畜の寢床が原義であつたと考えられ、その場所を作るべく宿營集團が集う状態を指す⁽¹⁾。したがって、遊牧民の集合體であることにおいて兩者は共通しているが、集合する目的を異にする語彙であつた。兩者を非日常的集合と日常的集合として對比するとわかりやすいであろう。これらがやがて城郭など都市的な土地利用の實態へと應用されるに及んで、その違いはどのようなものになつたのであろうか。著者の明らかにした「遊牧都市」のひそみにならえば、フホトは機能複合體として發展していくものの、その前身は漢人の職業集團別居住區であり、その意味では生産活動上の連携地區であり、また恒常的に固定的な都市である。したがって、それはホトであつてしかるべきであるように思われる。アルタン・ハーンが建設を命じたのはフレーではなくホトであつたというわけだ。當時のモンゴル人にとって理想的都市とされていただろウ大都はホトであつてフレーとして認知されてはいなかつた、と言い換えてもよいかもしれない。つまり、アルタン・ハーンの時代には、まだ遊牧集團として時折、臨時的に草原で集合することもあつただろうから、非日常的にフレーを構成する場合が多々ある時代だつたとも言つてもよいであろう。したがって、新たに建設に取り組む都市が、たとえ過去の榮光の再現であつたとしても、現役の圓陣形態であるフレーとして認識されるはずはあるまい。ところが、清朝時代になると、軍事集團として勝手に集合して圓陣を形成するなどあつてはならない時世となり、一方でチベット佛教寺院の建設が本格化していく。寺院それ自體が固定的になつてからも、それを取り

巻く集團はゲル住まいであり、極めて可變性の高い集住地區ができあがる。これは生産活動ではない特定目的の集住地區であり、また可變性が高いという點で、フレーであつてしかるべきであるように思われる。

ホトと呼ぶかフレーと呼ぶかは、實際のところ、歴史的な偶然に左右されたかもしれないので上記のような私見はこのあたりで終えておこう。それにしても、「遊牧都市」のもつ機能複合性を提示したあとで、遊牧民テントが展開できるだけの場所があるかないか、あるいは究極的にはテントが城内や域内にあるかないかによつて移動性を還元し、遊牧的要素を還元すると、いかにも意義が縮小して概念化されてしまふのではないだろうか。それよりも、複合的な機能を擔うそれぞれの地區へのまなざしを活かして、各地區の空間的可變性へと議論を展開したほうが實り豊かではないか、とさらなる論理的發展が期待される。

こうした認識に關する再検討の餘地が残されているほかに、本章では事實關係についても再検討の餘地が若干残されている。既にバイシンは中國語の「百姓」のモンゴル語訛りとして知られるようになつているが、本書ではその點に關する言及がなく、いかにも建築學的な「板升」の漢字譯だけが採用されている。そして著者はこの語について「歴史的に漢人が自分たちの住む村や堡を「板升」と呼ぶ事はなかつたので、本論では「モンゴル語説」に従う⁽²⁾（三九頁）としている。モンゴル人が自ら漢字を介して作つたモンゴル語と見なすにしても、漢字を経ないで存在していたモンゴル語であると見なすにしても、岡田英弘によつて提示された「百姓」説を覆すには根據が不十分なのではないだろうか。む

しろ、居住する人間集團に用いられるべき中國語「百姓」が、當時のモンゴル人の感性を通して居住形態の特性「板圍い」を表現する外來語として受容され、その受容されている意味を擔う別の漢字「板升」として後に固定化したとみなせば、ごく自然な解釋として成り立ちそうに思われる。ただし、それにしてもなぜ、モンゴル草原に居住することになった漢人集團を表現するのに、またある中國語群の中からこの「百姓」という語が選ばれたのであろうか。姓への注目は何を意味するのであろうか。巷で言われているように、姓をもたないモンゴル人の、姓をもつ人々への嫌惡的表現であるという解釋には、實は妥當な根據があるわけではない。なぜなら、『匈奴傳』における「無姓字」という記述から、北方遊牧民に姓が無いことに對する漢人側からの蔑視は確認されるけれども、同時に逆に遊牧民側が姓をもつことそのものを蔑視するという證據は得られないからである。そうした民族間對立を強調する解釋よりも、また岡田氏の提示していた農民の意とする解釋よりも、著者の本書での指摘の方が示唆に富む。著者が文獻を利用して本章で重視しているように、定住地區をわざわざ創設して人々を居住させようとしたモンゴル人支配者たちにとって最も重要であったのは職業地區の形成すなわち職人の移住であったことを考えると、多様な職能集團というほどの意味での注目があつたのではないかというのが評者の私見である。あるいは日本の古代の用語のように公的に居住が許されたという意味での公民といふような意味でもあつたのだろうか。こうした細部の再検討は、建築學者よりもむしろ歴史學者にゆだねるべきであるかもしれない。

商業都市としての發展

第二章〈中繼貿易都市の形成とその空間構造〉では、モンゴルへの漢人移民が許可された一七二三年から「清朝とロシアが天津條約を締結した一八六二年までの時代」（八九頁）が扱われる。それまでの「封禁」政策が放棄されて漢人移民が合法的に移住し始めると、「蒙漢分治」のもとで漢人の定住都市が形成され、やがて「地域からは徐々に遊牧的要素が驅逐され、しだいに完全な定住型都市へと變貌していった」（八九頁）と解説されている。また、一七二七年のキヤフタ通商條約によって山西出身の漢人もしくは回民が中繼貿易に従事し、各地に「買賣城」が形成されたちなみに、本書では終始一貫して、日本語ワープロソフトが提供する現代日本語としての漢字の順序で「買賣城」と記されているが、そもそも中國語として正しくは「買賣城」である。なお同様に、「滿州」ではなくて「滿洲」である。

フフホトの場合は、第一章で見たように宗教都市として變容していたが、さらにこの時期に交易によって「中繼貿易都市として成長した」（一八五頁）と結論づけられている。著者の専門を活かしたフィールドワークの眞骨頂が、地圖を含む文獻涉獵の成果とともに發揮されているのはまさに本章であろう。フフホトの建築物を念入りに調べた結果、「中國建築」に「山西様式」と「中華式」の二種類を見出し、前者は民間人による中國の地方建築文化化であり、後者は清朝政府による滿洲建築文化であること、さらに前者は「買賣城」という北アジアに獨特のチャイナタウンを創出することに寄與しており、また後者はモンゴル人自身の住居や

寺院、官署などその定住化を促進したことにについて明らかにしている。

この時期、フフホトは中國語で「歸化城」と呼ばれることが通例となった。當時、都市計畫は無かったけれども、商業化が一定の原理で都市の土地利用を高度化していく。例えば、商店街がすべて複数の寺院を結ぶ経路上にあること、袋小路や抜け道を通して住居密度を高めていくこと、門前には道路幅を微妙に廣げた三角形の廣場ができることなどが指摘されている。寺院間の回廊が商店街になる點はラサを連想させ、新たな道を通して高密度化する點は中世の京都の辻子などを連想させるなど、こうした特徴はいずれも街路が商業空間として重要性を増す現象と運動している。

この時期の都市發展をまとめるにあたつて著者は、街路を遊牧的と定住的とにアプリアリに分類してしまう。ここで遊牧的道路構造とは街路が非直線であることを指し、定住的道路構造とは東西南北に條坊街區が整っていることを指す。街路の「非直線的形狀」と「直線的形狀」を單純に「遊牧的」と「定住的」とに二分して形容してもよいものかどうかは疑問としておきたい。

概して、アルタン・ハーンによつて建設されたフフホトに、宗教機能や商業機能が附加されることによつて、地區ごとに民族的な住み分けのある都市構造が出現する過程が鮮やかに示されたことは、歴史學にとつてきわめて意義深いであろう。

機能と形態の複雑化

第三章〈綏遠城の空間構造と變容〉では、歸化城から二・五キロメートル離れた位置に新たに綏遠城が建設され、雙子都市構造

に至る様子が描かれる。この新城は、ジュンガル部平定のために一七三五年から建設された、前線の軍事施設である。滿洲軍の駐屯のための都市は八旗城と呼ばれ、清朝全土に分布するものの、明朝の舊城を利用する限り、「理想とは異なるものであった。その點、八旗城の理想は新たに建設された綏遠城によつて實現したということができる」(二一〇頁)とある。理想の具現化は、それを可能にする空間的餘地の存在によつて可能となったのであるから、これはフロンティアにおける都市建設の特徴であると言えるのではないだろうか⁽²⁾。

八旗城をめぐる理想とは、具體的には、五行理論に應じて方向を定めることや官吏の等級に應じて建物の規模を定めることを指す。こうした事實を、著者は聞き取り調査によつても確認している。二百七十年前の都市計畫について現代もなお聞き取りが可能であることは驚くべきことである。空間利用の持続性が見られることを裏附けており、そこに注目した著者の濃密なフィールドワークの成果を慶びたい。

綏遠城の建設は、民族別の住み分けを促進し、モンゴル人の定住化を加速し、結果的に「モンゴルの都市が「中華」に編入される契機をなすものであった」(二一八頁)と結論づけられている。

近代化を用意する、多様な近世

第四章〈都市と建築の「近代」への變容〉では、一八六〇年から一九五九年までが考察される。一八六〇年は北京條約が締結された年であり、こうした條約締結を契機として、西洋諸國からの影響がどのように都市の構造や建築に現れたのかが問われている。

下限は中ソ對立の初期に相當する。この時期の都市の變容に關して著者が注目するのは、教會建築、鐵道開通、日本人による都市計畫の三點である。

教會建築については、都市的な據點が増大したことで、建築物において西洋的技術や意匠が浸透したことが指摘されている。カトリックの普及にあたっては、農民に對して土地配分が行われていたことなど興味深い事實も指摘されている。ただし、フフホトにおける都市構造への影響については明示されていない。鐵道開通にあたっては、驛の建設豫定地と驛の建設地との二箇所にあつて新しい市街地の形成を見た。フロンティア都市はさらに機能を加えもち、その空間を廣げていくのだった。

滿洲國の設立に續いて一九三七年、張家口に察南自治政府、大共に晉北自治政府、厚和（フフホト）に蒙古連盟自治政府が設立され、關東軍の要請によつて滿洲國から都市計畫技術者が派遣され、日本人によつて都市計畫が策定された。著者は、現地の建設檔案館でこの原圖を發見し、當時の都市計畫案を明らかにしている。それによれば、雙子都市の間にロータリーが計畫されていた。この案は完成を見ないが、戦後のフフホト都市計畫の基本案はこれをベースにしているという。滿洲國時代の技術者の系譜がこうした踏襲をもたらしていることも明らかにされている。

一方、建築様式という點では、オルドスのチンギス・ハーン陵とウランホトのチンギス・ハーン廟を例に、モンゴル族でない近代建築の設計者によつて「モンゴルの」建築様式が創造されていくさまを描いている。現代に近づいて資料が豊富になるだけに、建築史と都市史は分斷的に語られ、フフホトの都市建築史を越え

た情報提供もなされている。

以上のような分析を経て、終章（異文化・異文明を受容するアジアの近代）では、モンゴルの都市空間における異文化受容のプロセスが再び整理される。すなわち、「傳統的なハーンのオルドを中心とする遊牧都市は、オルドとモンゴル佛教寺院が中心に並んで配される遊牧都市へと變容し」（二七九―二八〇頁）、官民二つの中國建築の影響を受けて定住化し、その後には西歐に起源する近代文明を受容し、「遊牧文明の傳統を基盤としていたモンゴルの都市と建築からは一氣に地域性が失われ、他の傳統を基盤とする地域と何ら變わらない都市へ變貌を遂げていくこととなった」（二八六頁）と斷じている。

さらに著者は、チベット佛教の受容による變容期を「近世前期」とし、その後を「近世後期」として細分して濃密化しておいたうえで、こうした「近世」こそは、地域文化の多様性が開花した時期であり、それゆえにこの時期への注目が都市の近代化論に必要であるという結論を導いている。そもそも、「近世」は西洋史にはなかった時代區分であるため、西洋に起源する現代建築學がアジアの都市を分析するにあつて「近世」に焦點をあてるべきだという主張は、今後の都市史理解にとつても重要な論點であろう。

さいごに

以上のような内容をもつ本書は、フフホトの歴史に焦點をあてつつ、地域文化の空間的な具現化について、近世から近代にかけての多様化とその喪失の一例として整理することに成功してい

と思われる。先に批判的に述べたけれども、空間的可變性に關する議論は實のところ十分に本書で行われていた。ただし、本書の冒頭で提示された「遊牧都市」というオリジナルな概念は、往々にして移動式テントの有無や街路の形式などに絞込まれ、要素還元主義的になりがちであり、最終的には「ハーンのオルドを中心とする」(二七九頁)という形容に收斂してしまいかねない點を評者としては問題視したい。

そもそもハーンのオルドとは動く宮殿施設であり、大きな宿營地と言い換えてもよく、これを「遊牧都市」のいわば原型と見立てるとして、その後固定施設が増大し、移動性を失うにつれて「定住型都市」化したと見なすのであれば、そもそも「遊牧都市」の概念を提示する有効性そのものが失われてしまうことを評者としては最も危惧するのである。移動的要素の有無に還元する概念に徹すると、畢竟、過去の局面を形容するにとどまり、その理論的貢獻度は著しく低下するだろう。

「遊牧都市」という概念が生業による形容を特徴としている以上、理論的に整合して對比される概念は「農耕都市」であってしかるべきである。すなわち、遊牧世界にも都市はあり、農耕世界にも都市はある。都市とは、兩者に共通して機能中心地であり、しばしば集積的な投資により、固定施設を伴う。それでは、非定住の世界における機能中心と、定住的世界における機能中心とは、何がどのように違うのだろうか。このような問いに變換して「遊牧都市」という概念を再構築することも可能なのではないだろうか。

例えば、ドゥルーズらが強調する哲學的遊牧民論ノマドロジ

において、遊牧民は秩序外の存在であり、反秩序の象徴とされるのに對して、東アジアにおけるノマドは秩序を構築した主體者であり、秩序の象徴となりうるという異論を提示することができ、しかもこの違いは、農耕世界の中心に都市があつて遊牧がそこからはずれるという空間構造と、遊牧世界の政治中心として、あるいは遊牧世界と農耕世界の交易中心として遊牧世界の中に都市があるという空間構造との、本質的な違いを反映しているように思われる。³⁾したがって、都市論として議論するならば、都市的空間を構成している内部の差異に注目するばかりでなく、むしろ外部との關係性、とりわけ他の都市群を考察に含めた〈都市システム論〉として議論を展開することによって鍵概念としての有効性が證明されるのではないだろうか。

あるいはまたモンゴル國で土地私有化が推進されている現在の觀點から、次のような準據枠も設定しうるだろう。農耕世界であれ、遊牧世界であれ、都市とは日常的に生業に従事しない人が生活する空間であり、その意味で、第一次産業によつて生産される財が他の富に轉換されたり、もっぱら消費されたりする場所である。政治都市であれ、宗教都市であれ、遊牧世界の場合は、動産社會の中にあつて不動産が形成され、富の質的大轉換が生じうるその空間的投影として考察するならば、〈都市内部構造論〉からの議論も興味深いと思われる。

いずれにせよ、「遊牧都市」を、失われた文化への郷愁として追究するのではなく、從來考慮されなかった視點からの都市論を提供することのできる概念であるがゆえに、未來の文明を讀み解くためのキーワードとして考察することを提案したい。

本書は、十全な建築學的分析によつて、こうした都市論への理論的展開の前線を歩む勞作であることを拙評の最後に再度強調して、精力的に研究を進める著者の今後に大いに期待する。なお、モンゴル語のローマナイズなどの單純なミスは、草稿段階で當該分野の研究者によるチェックによつて防げたであらう。しかしもちろん、それらの些細なミスは、本書の意義を根本的に損なうものではない。

註

(1) 評者はかつて「モンゴルにおける家畜預託の慣行」『史林』六九卷五號(一九八六年)の注④において、ホト(ホタン)とフレ(クリエン)の概念的對比をしておいた。

(2) 草原での定着化には、廣域的な農耕化にともなう定着化と、地點の都市化による定着化という二つのプロセスがあり、ホトとフレの概念の對比を應用しながら整理することもできる。小長谷有紀「中國フロンティア地域における都市的集落の發生と變容——草原フロンティアの場合——」戸祭由美夫編『中國フロンティアゾーンにおける都市的集落の發生と變容』(課題番號一三三〇八〇〇三) 研

究成果報告書、一七一—一九〇頁

(3) 評者は日本中東學會において「The City coming from the Social Organization inside the Mongolian Nomadism」と題する報告の中で、農耕社會と都市と遊牧社會との關係を二つのパターンに分類して圖式化したことがある。日本中東學會第十六回年次大會(二〇〇年五月十三日・十四日、北海道大學) プログラム・要旨集、五〇—五七頁

参考文献

岡田英弘「書評 萩原淳平『明代蒙古史研究』」『史學雜誌』九〇卷八號、七九—八五頁、一九八一年

ドゥルーズ、ガタリ著、宇野邦一ら譯『千のプラト——資本主義と分裂症』河出書房新社、一九九四年
マイダ爾著、加藤九祚譯『草原の國モンゴル』新潮社、一九八八年

二〇〇五年二月 東京 東方書店
A 五判 xii + 311 + 11 頁 九八七〇圓